

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

| | |
|--|--------------------|
| 論文提出者氏名 | 劉 珉 |
| 論文題目 | 王陽明資料の新研究―龍場に至るまで― |
| <p>審査要旨</p> <p>明の王陽明（守仁）は中国近世を代表する思想家の一人である。その陽明の従来の伝記研究は、門弟の錢徳洪を中心に弟子たちが編集した『年譜』を軸に行われてきた。この『年譜』は質量ともに充実したもので、第一級の資料であることには今も変わりはないが、近年は新資料の発見がめざましい。例えば著者が指摘するように陽明の文集には、【第一系統】姑蘇本『陽明先生文録』、【第二系統】閩東本、【第三系統】④『陽明先生文録』三卷、⑤『新刊陽明先生文録続編』三卷（上海図書館蔵、嘉靖十四年王杏跋）があるが、そのうち第二系統と第三系統が紹介され研究されはじめたのはさほど昔のことではない。それを受けて王陽明の伝記にも多々修正補訂が加えられるようになり、近年の束景南『王陽明年譜長編』四卷（上海古籍出版社、二〇一七）、『王陽明佚文輯考編年（増訂版）』二卷（上海古籍出版社、二〇一五）などもその一例である。著者は先行研究を十分ふまえたうえで、更に王陽明と関係を持った士大夫たちの別集や、『明実録』や『登科録』などの歴史資料をも駆使し、先行研究を修正補訂している。本論文の内容で特筆すべきなのは、王陽明と交流した士大夫の別集を調べてその政治的姿勢や文化的方向性を捉え、また歴史資料によって彼らの経歴や政治的立場を明らかにしたことである。それによって各時期の王陽明がどのような士大夫グループと交流していたのか、政治的立場や文化的嗜好はどうであったのかが明らかになった点が多々ある。本論文は陽明の前半生、つまり龍場にいた時期までを中心としているが、この研究によって陽明の思想形成の過程が従来言われてきたのとは異なる点があることが示された。ともすれば軽く扱われがちだった陽明の前半生を著者が重視するのは、そこに陽明の生来の資質や嗜好、後半生に展開していく可能性などが生の形で見えるからである。なお著者は龍場時期についても第四章で論究し、更に付録として後半生の重要な結節点である江西時期についての論考も付している。言うまでもなく龍場時期と江西時期は陽明の二大転換点とされてきた。つまり前半期中心の研究とはいえ、内容的には、陽明の思想形成史で問題になってきた二つの時期の研究も含みこんだものとなっている。</p> <p>本論文が新たに指摘した点は多々あるが、そのうちいくつかをあげておきたい。まず陽明が進士に登第する以前の彼の交遊を徹底的に調査し、朱子学への違和感に悩む陽明という従来見られがちであったこの時期の陽明像を否定し、当時彼が強い文学嗜好を持っていたことを掘り起こし、さらに「即事五十韻」という作品に注目することで、軍事と文学への旺盛な関心を持っていたことを証明した。また陽明の思想的覚醒の端緒とされてきた婁諒（一斎）との出会いのきっかけについても再考証を加え、あくまで夫人の祖父の喪に駆けつけた諸夫人一家の帰郷を利用して拝謁したに過ぎず、実質的な影響が言える資料に乏しいこと、むしろ婁諒の子の婁性と親しく交遊したことを指摘している。陽明の思想遍歴の大きな山となるのは投獄され更に龍場に送られる時期であるが、いわゆる「龍場の悟り」といわれている有名な悟得についても、通念とは異なった見方を提示している。その考証過程で著者は龍場で陽明が執筆した文献を列举しているが、その中には従来取り上げられなかったものも含まれ、更にその文献が宛てられた相手の士大夫の調査も行い、成果をあげている。例えば陽明の直筆が残る「何陋軒記」の宛先が王蓋という人物であることをつきとめ、彼が当時南京にいたことから、従来龍場で外界と遮断されたかのように見なされていた状況に疑義を呈していることなどは目覚ましい成果であろう。一般に龍場で陽明は死と</p> | |

氏名 劉 珉

向かいあう窮迫の生活を送り、そこで劇的な悟りを得たとされるが、著者は、当時の陽明が少数民族と融和し、門人も得て高官との交流もあったことを指摘する。またこの時期に「心即理」を悟ったとされることにも再検証を加え、この時期に陽明と交流した席書（元山）の資料から龍場を離れる時点でもいまだ朱子学的な未発・已発という枠組みを取っていたことを指摘している。著者はまた「付録」で、陽明が致良知を唱えるようになった江西時期の分析を行う。ここで著者は、陽明のこの時期の資料に「思歸（帰郷への想い）」が目立つことに注目し、官僚として踏み行こうべき目前の価値と肉親尊重という価値の深刻な葛藤があったことを摘出する。そして前者の価値に結果的に従っていった中で「致良知」が生み出されたという見解を示す。また江西時期より後であるが、「大礼の議」における「議礼派」と陽明の交流を分析し、晩年の陽明に非政治的志向を見る見方に対して陽明の政治への衰えぬ関心が維持されていることを指摘する。

本研究は伝記研究として意義あるものではあるが、それでも各時期の陽明の思想あるいは思想的志向についてのより立ち入った検討が求められよう。例えばいわゆる「龍場の悟り」なるものが一気の悟りではなく緩やかな覚醒であったというにしろ、それを厳密な思想分析の形で示すことが望まれる。また江西時期の致良知説の形成が、複数の価値の衝突の克服の中でなされたという指摘はまことに示唆に富むが、これも思想的に立ち入って分析してほしかった。しかしこれらのことは龍場以後のことであり、龍場までを扱った今回の研究を土台に展開する次の段階で期待すべきことであろう。また本論文は、主題とした龍場時期までに限っても、従来の見方を修正する必要がある事跡の考証が中心で、必ずしも網羅的な伝記研究というわけではない。例えば本論文で取り上げられなかった竹の理の格物の逸話、龍場行の時の刺客襲撃事件の真偽、思想上の対抗者となる湛若水（甘泉）との出会いなどについても、今後著者に精査を期待したい旨、公開審査会でも要望があった。

総じて地味な内容であるが、今まで使用されていなかった多くの資料を駆使した厳密な実証的研究であり、陽明伝記研究を確実に前進させる成果として学界を大きく裨益するものと言える。

以上により、本論文を博士学位を授与するのにふさわしいものであると判断する。

| | | | | |
|----------|-----------------|--------|---------------|-----------|
| 公開審査会開催日 | 2020 年 2 月 26 日 | | | |
| 審査委員資格 | 所属機関名称・資格 | 氏名 | 専門分野 | 博士学位 |
| 主任審査委員 | 早稲田大学文学学術院・教授 | 土田 健次郎 | 中国近世思想・日本近世思想 | 博士(早稲田大学) |
| 審査委員 | 早稲田大学文学学術院・教授 | 森 由利亜 | 中国近世宗教思想 | |
| 審査委員 | 早稲田大学理工学術院・教授 | 永富 青地 | 中国近世思想 | 博士(早稲田大学) |